東京新聞
中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話03(6910)2211

首都圏の地元紙

東京新聞広告局
この資料に関するお問い合わせは
●営業推進部
TEL03(6910)2483
FAX03(3595)4877

「東京の今」届けます

5地域版生き生き
生活情報や市井の息吹

東京都内の地域版を「都心」「山手」「したまち」「武蔵野」「多摩」の五版制にした東京新聞の紙面が好評だ。取材陣も充実させ、首都・東京の地元紙として、他紙にはない地域に密着したきめ細かいニュースを提供している。最終面のTOKYO発では、上空から東京を一望する「望～都の空から」も月一回掲載。日々変わりゆく東京の姿を生き生きと伝えている。

東京新聞の編集方針の柱は「東京の今がわかる」だ。五つの地域版が、それぞれのエリアに暮らす人たちにとって欠かせない生活情報を詳しく報じている。

完成が近づく東京スカイツリーや、上野動物園に復活したパンダ、都知事選の動向など、エリアにかかわらずだれにとっても関心の高い「東京ニュース」は、一面や社会面でも大きく扱っている。

住民の目線で

行政では、都、二十三区、多摩地区の市町村の予算、事業などを細かに伝え、住民の視点から自治体の問題点もチェック。教育、医療、福祉など、自治体によって対応が異なる施策は、「二十三区比較」といった表にし、「私の街は、ほかと比べてどう？」という疑問に答えている。

行政以外でも、祭りや、街の有名人、季節の風物詩といった、身近な話題、ニュースも積極的に取材。東京のスポーツ情報も満載で、サッカーJ2のFC東京、東京ヴェルディ、JFLの町田ゼルビアの都内三チームの動きは「オーレ！東京」というコーナーを設けて随時フォロー。少年野球チームを紹介する「大好き！学童野球」も人気だ。

関東広域にわたるニュースは「メトロポリタン」面を中心に展開している。日替わりで大型コーナーを設けており、新年からは水曜日に「談論誘発」がスタート。羽田空港の国際化や待機児童対策、若者の就職難など、首都圏全体の懸案について、自治体の長や専門家が持論を展開、幅広い議論を巻き起こすのが狙いだ。

展覧会やイベントの情報が一覧できる木曜の「TOKYOインフォメーション」は、読者サービスの目玉。火曜日の「NIE（教育に新聞を）」では、分かりやすくニュースを解説する「はてな？ニュース　なるほど！」などのコーナーがあり、小中高校生による「新聞切り抜き作品コンクール」も実施している。

最終面のTOKYO発は、東京で日々生まれる謎や驚きを写真とともに伝えるページとして人気を集めている。「都心の野生タヌキは皇居がすみか！」「葛飾の寅さん像の左足を触ると願いがかなう」…。家庭や職場で話題になりそうなそんなトピックを連日、メイン記事として展開している。

〝東京雑学〟も

メインのほか、左肩のスペースは日替わり企画だ。東京にまつわる雑学を集めた「東京トリビア」、長い不況の中でも、日々奮闘する企業経営者の日常をつづった「社長日記」、半世紀以上にわたって多くの健啖家に支持されてきた老舗の味の秘密に迫る「美味の遺伝子」、流行の兆しを探る「みやこｄｅプチブーム」が主なラインナップだ。

毎週土曜日には、イラストマップ付きの街歩きのページ「東京どんぶらこ」を掲載。日曜日は今年からベテラン編集委員による、市井の人々のものがたり「歓びも　哀しみも」を始めた。

昨年から好評を得ている空撮「望～都の空から」に加え、今年から東京湾や多摩川などの水中を撮影する「水とともに」も月一回掲載。今も形で進化し続ける東京の姿を、さまざまなアングルで記録し、読者に提供し続けていく。それが、東京の名を冠する本紙の使命でもある。

東京スカイツリーの上方から都心方向を見る。新年の穏やかで澄み切った空気の向こうに富士の雄姿があった＝2011年1月9日付「望～都の空から」

Webでも
東京情報を発信

Webサイト「東京新聞ほっとWeb」でも東京の情報をさまざまに発信している。

東京二十三区の区長が出題と解説をしてくれる「東京ほっと検定」は、東京の意外な知識や雑学を知ることができるコーナー。毎週七問の出題のうち一問は、TOKYO発の水曜日に連載している「東京トリビア」と連動している。

ほかにも、女優の西山繭子さんが書き下ろすウェブ短編小説「東京23話」、落語家の桂枝太郎師匠がさまざまな分野の女性をインタビューする「東京マドンナを訪ねて」など、東京の今がわかる楽しいコンテンツを掲載している。

東京新聞を、もっと楽しむサイト
東京新聞ほっとWeb

東京ほっと　検索　http://hotweb.tokyo-np.co.jp/
東京新聞ほっとWeb モバイル版　http://hotweb.tokyo-np.co.jp/i/

筆洗

落語を毎日聞ける寄席は、戦後、東京に十数カ所あったそうだが、今は上野鈴本演芸場、浅草演芸ホール、新宿末広亭、池袋演芸場の四カ所しかない。座席数が九十二席と一番少ない池袋演芸場は、演者の息遣いが伝わる距離の近さが魅力だ▼この高座で突然「芸」を披露することになったのは昨年六月。落語芸術協会の三笑亭可龍さん、春風亭傳枝さんの真打ち披露興行だった。トリの前に出る予定だった人気の漫才コンビ「ナイツ」の一人が、時間に間に合わないハプニングが起きたのだ▼すでに出番を終えていた太神楽の鏡味正二郎さんが再登場。どうなるんだと最前列で面白がっていると、突然、「上がってください」と声が掛かった▼傘に球を乗せて回す曲芸をやってみろというリクエスト。高座に立つと頭は真っ白。客の顔が見える分、緊張する。教えられた通りに腰を落とし傘を回すと、傘の上の紙風船が案外うまく回ってくれた。お客さんの温かい拍手が身に染みた▼東京新聞は池袋演芸場に似ているような気がする。読者との距離が近く、反響はストレートに伝わってくる。記者のやりがいがとても大きい▼もう一つ加えるなら自由さかもしれない。持ち時間が長い池袋演芸場を好む落語家が多いように、東京新聞も自由に取材している記者が多い。お客さんが少ないところも似ているとは言いませんが…。

まちづくりの応援を
本紙に期待　浅草の肝っ玉おかみ

「これからは人（ひと）を育てる時代だから、新聞も力を発揮してほしい」と、強く願う冨永照子さん。いまや全国にその名を知られる「浅草おかみさん会」の創設者であり、いまなお先頭に立って活動をリードする。冨永さんを慕うおかみさんたちが各地に増え、はやりの〝女子力〟でまちおこしに取り組んでいるとか。

「おかみさん会を始めたころは、おんなのくせにって、旦那衆がつぶしにかかってきたし、いまは大手の企業さんが商店街にとって強力なライバルになっちゃった。この四十三年間、戦（いくさ）の日々だったけど、唯一応援してきてくれたのが、東京新聞だった」

東京新聞への思いを語る「浅草おかみさん会」の冨永さん

一時元気を失いかけた商店街の活気を取り戻そうと立ち上がったおかみさんたち。その姿を丹念に取材し広く社会に伝えてくれた、と冨永さんは感謝する。

「私たち女性にとって、手っ取り早く世の中の動きを知るには新聞が一番。だけどどの新聞も同じ記事ばかりになってしまって。だから私はお願いしたいのよ。全国どこも同じ事情だけど、いま商店街の活力を生むためには後継者を育てなきゃなりません。地元の新聞は、そんな事情を一番よくわかっているんだから、何が問題なのか公平な立場で記事を書いてほしいとつくづく思います」

若手のおかみさんが頑張っている話や、おかみさんたちが知恵を出し汗を流すイベントの話題などを新聞で取りあげてくれれば、もっと勇気も出るし、子どもたちも跡を継ぐ気になるんだから」と、応援団としての東京新聞に熱い期待が寄せられている。

広告事例

甲府鳥もつ煮
2010年11月19日付朝刊３段

矯正展
2010年11月２日付朝刊３段

地域活性化に一役
人とつながる新聞広告
必ず伝えたい何かがある

東京新聞の地方版に載る小さな広告にもメッセージがある。そこには必ず伝えたい何かがある。首都圏にあっても、地域が抱える細かい事情に耳を傾ける。そうした東京新聞の紙面づくりが、地域や企業、行政の期待に応えている。

独自の食文化支え

二〇一〇年九月、B級ご当地グルメの祭典である「第五回B－1グランプリ」で甲府市の「甲府鳥もつ煮」が優勝を飾った。戦後まもない昭和二十五年ごろ、「鳥のもつが捨てられてもったいないので、何か安くておいしいものができないものか」と市内のそば屋で考案され、今では独自の食文化となった鳥もつ煮。しかし優勝後、一口味わおうと観光客が押し寄せる一方、すし店やラーメン店までがメニューに載せる騒ぎに。「偽物があふれて評判を落とさなければいいが」と危機感を募らせた地元の湯村ホテルが打った手は、関東圏内に幅広く発行している東京新聞に「正しい鳥もつ煮」を知ってもらうための広告を出すことだった。読者プレゼントの反響も百件を超え、「反応も上々」。さらなる地域ブランド化へ向けて、次なる提案を模索している。

矯正展を盛り上げ

受刑者が社会復帰に向けて作った食品や日用品を持ち寄って即売会などをする矯正展。二〇一〇年十一月に同展が開催された川越刑務所では、野菜やみそなどの人気が高く、無農薬栽培の野菜は市価の半額程度。大根百五十本やニンジン百本などは開場してから一時間ほどで売り切れた。「刑務所」と聞くと抵抗感を持つ人も少なくないが、受刑者の作ったものはどれも品質がいいと来場者の評判も良く、売上げの一部は犯罪被害者支援団体の支援に当てられている。

東京新聞で広告が掲載された「全国矯正展」や「府中刑務所」では来場者、売上げともに前年より大幅アップ。全国紙ではカバーできない細かな情報をフォローすることで、地域を活性化している。

読者の新聞評価
東京新聞は連日晴れ模様

すべて晴れマークなのは東京新聞のみ。他の新聞は雨マークが多い中、「地元の記事が詳しい」「記事内容が面白い」で晴天に恵まれる。「記事内容がわかりやすい」「情報の量が多い」も気温が一番高く、東京新聞はしばらくお出かけ日和が続きそうだ。

	記事内容がわかりやすい	記事内容が面白い	地元の記事が詳しい	情報の量が多い
東京	晴 40.8	晴 29.2	晴 27.6	晴 34.7
朝日	晴 31.9	雨 13.1	雨 7.0	晴 25.7
毎日	晴 38.1	曇 16.1	雨 8.5	晴 27.0
読売	晴 39.6	雨 14.5	雨 11.6	晴 25.8
日経	曇 17.3	曇 19.0	雨 0.9	晴 28.0
産経	晴 28.6	曇 19.9	雨 2.4	晴のち曇 23.3

出典:ビデオリサーチ「第10回全国新聞総合調査」(J-READ:2010年実施)

マークの見方　晴＝25%以上　晴のち曇＝20%以上　曇＝15%以上　雨＝15%未満

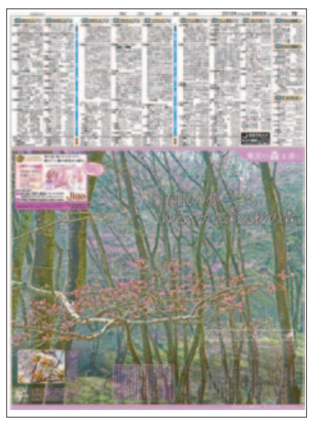
「東京の森を歩く」
新聞広告賞を受賞！

最終回の紙面。変形紙面（スペースインパクト）を使い、１年間の集大成を掲載。

東京の森を約１年にわたり紹介した広告企画「東京の森を歩く」が日本新聞協会「第30回新聞広告賞」の新聞社企画部門で本賞を受賞。合わせて、日本アドバタイザーズ協会「第50回消費者のためになった広告コンクール」の新聞広告部門にも入賞しました。

東京新聞夕刊（2009年６月29日～2010年５月28日、15回掲載）

春眠の夢ごこち、ゆるやかに彩る桜の森
滝山公園の森（八王子市）



かつて「滝山城」があった「都立滝山公園」は戦国時代の面影を残す城址公園。約5000本にも及ぶといわれる桜の木が群生する、都内屈指の桜の森を鑑賞。
（2010年３月30日紙面）

手軽だけれど奥深い、雪をまとった三つ星の森
高尾山の森（八王子市）

都心から電車で約１時間。1500種類以上の植物が観察できる「高尾山」は希少な特徴に恵まれた森。世界的な観光ガイドブックで３つ星に評された森の魅力。
（2010年２月23日紙面）

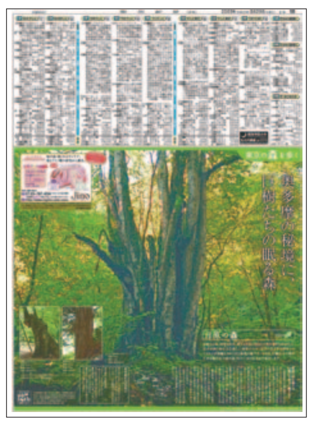
和歌の心を味わう、江戸元禄の庭園の森
六義園の森（文京区）

「六義園」は和歌に長けた柳沢吉保が1702年に築園した「回遊式築山泉水」の大名庭園。自然の美しさと、和歌の心にあふれた繊細で優雅な庭園の森を回遊。
（2009年11月26日紙面）

やさしい時間が流れる、都民のブナの森
檜原都民の森（檜原村）

三頭山の中腹にある「檜原都民の森」は四季折々の景観や希少な動植物と出会える山岳森林公園。広大な園内のうち、昔からの自然が残る「ブナの森」を散策。
（2009年10月27日紙面）

奥多摩の秘境に、巨樹たちの眠る森
日原の森（奥多摩町日原地区）



奥多摩町日原地区は近代まで、東京とのアクセスが困難とされてきた秘境の地。巨樹巨木の数が千本を超える「日原の森」から生命力にみちた三本の巨木を紹介。
（2009年９月29日紙面）

緑の風がここちよい、大都会の巨木の森
新宿御苑の森（新宿区）

都心とは思えないほど豊かな自然にあふれた「新宿御苑」。とりわけ緑が深い武蔵野の里山を復元したエリア「母と子の森」で、生きものとのふれあいを体験。
（2009年６月29日紙面）

東京新聞のリアル東京

東京新聞では、広告も地域に根ざした企画展開を推進しています。イベントと連携した立体的な広報から地場企業を応援する企画、暮らしのインフラ情報、お出かけ情報まで、読者を意識した訴求力の高いPR手法は、広告主から高い評価をいただいています。

おでかけスポットの宝庫、東京を味わいつくす！

東京アートガイド企画　2010年8月5日付　朝刊各5段

事業局と連携して取り組んだのが都内の美術館情報。編集面の首都圏情報「ゆめぽっけ」で毎週木曜日に掲載される人気紙面「美術館・博物館ガイド」の記事直下に5館の美術館を連合で掲載した。記事情報と広告情報が融合した紙面に、各館より評価の声が上がった。

大人の遠足企画　2010年9月20日付　朝刊15段

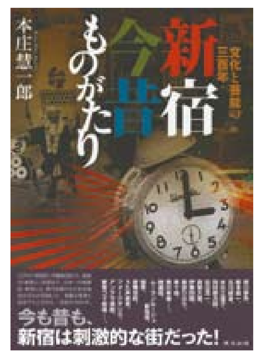
子どもの頃には気付くことのできなかった地域の素晴らしさを再発見してほしい。この趣旨のもと、都内でありながら自然と文化、風情を残す多摩・武蔵野地区の観光地やイベント情報などを毎年秋に掲載している。広告主からは「平日の中高年の女性のお客が増えた」、「東京新聞の読者は雑誌などの読者よりお土産を購入してくれる」など評価も高く、東京の地元紙・東京新聞にしかできない細かな情報提供が、広告主と読者を繋いでいる。

あーととらいあんぐる　2010年4月30日付　夕刊10段

周辺を大きな美術館に囲まれ、知名度に悩んでいた港区の三つの美術館。東京新聞がこの三館をつなぎ、共同で集客を図る方法として展開しているのが「あーととらいあんぐる」。二回目となった今回も、より多くの人に来てもらう仕掛けとしてスタンプラリーを実施した。東京タワーにその台紙を置いてもらうなどの工夫をし、参加者も前回から1割増となった。神奈川県の小学校からは「授業で使用したいのでこの事業の資料がほしい」という問合せがあるなど、各方面から反響を呼んでいる。

「東京の本」も東京新聞

東京を伝える東京新聞は、東京に関する書籍を多く刊行。下町の人や暮らし、街が育む文化の息吹など、風情豊かな東京を楽しんでいただけます。



「新宿今昔ものがたり」
1,400円（税込）

「浅草の唄」
1,500円（税込）

※お問い合わせは、東京新聞出版部☎03−6910−2527
（祝日を除く月〜金曜日の午前10時〜午後6時）

芸術からスポーツまで多彩な東京新聞の事業

東洲斎写楽《三代目大谷鬼次の江戸兵衛》
大判錦絵　寛政6年5月
アメリカ・メトロポリタン美術館蔵
©The Metropolitan Museum of Art/Art Resource, NY

東京新聞事業局では、展覧会や舞台、スポーツ、シンポジウムなどさまざまなイベントを開催しています。

2011年は5月1日から東京国立博物館で「特別展　写楽」が開催されます。10ヶ月間で140図余りの版画を残し突然姿を消したため、「謎の絵師」といわれる写楽。本展では現存するほぼ全種類の作品を世界中から集めた空前の規模の展覧会です。
また恒例の舞台事業でも、洋舞、邦舞の大会をはじめさまざまなジャンルに渡り年間を通じて実施します。スポーツでは、8月に神宮球場を中心に学童野球の日本一を決定する「全日本学童軟式野球大会」や3万6千人が2月の東京を駆け抜ける「東京マラソン」など、各種大会を開催しています。

たくさんの人でにぎわった「没後120年　ゴッホ展」
（2010年10月1日〜12月20日、国立新美術館）

期　間	件　名	会　場
4月9日〜6月12日	駒井哲郎1920−1976	町田市立国際版画美術館
5月1日〜6月12日	特別展　写楽	東京国立博物館
6月14日〜7月31日	生誕130年　没後90年　橋口五葉展	千葉市美術館
7月2日〜8月21日	「うらめしや〜、冥途のみやげ」展	東京芸術大学大学美術館
8月中旬	高円宮杯第31回全日本学童軟式野球大会	神宮球場など
8月27日、28日	第10回東京国際和太鼓コンテスト	こどもの城・青山劇場
9月24日	第47回推薦名流舞踊大会	国立劇場
10月16日	第17回日本トライアスロン選手権東京港大会	台場〜青海
10月22日、23日	第19回東京新聞名流祭	浅草公会堂
10月23日	2011グリーンリボンランニングフェスティバル	国立競技場
11月29日〜12月4日	第33回東京書作展	サンシャインシティ文化会館

※2011年4月1日現在。社会情勢等によって変更する場合がございます。
※お問い合わせは、文化事業部☎03−6910−2345、企画事業部☎03−6910−2509（祝日を除く月〜金曜日の午前10時〜午後6時）

息づく文化・伝統、東京ならではの情報！

チケットインフォメーション50回記念　2010年1月21日付　朝刊15段

都内で開催されるコンサートや演劇、古典芸能などのイベント情報を発信して計50回目を迎えた「チケットインフォメーション企画」。年配者や20〜30代の女性からの反響がよく、全国紙やフリーペーパーなどの出稿をやめ、東京新聞のみに切り替えた広告主もいるほど。記念となる当紙面では、末廣亭の席亭に「寄席の楽しみ方」を語っていただいた。

かつしか文学賞　2010年8月30日付　朝刊15段

葛飾区が同区を舞台にそこで暮らす人の心のふれあいを題材とした作品を募集した「かつしか文学賞」。寅さん以外にもさまざまな文学作品の舞台として有名な葛飾区は、文学の香りが漂い、人情味あふれる土地柄で人々を魅了してきた。同賞は東京新聞が後援となり、葛飾区の魅力を記事スタイルで伝えるタイアップ紙面や募集告知を掲載するなど全面的にサポート。全部で169の応募があり、葛飾区はじめての事業は、好スタートを切った。

暮らしのインフラ、地域メッセージ！

東京23区のんびり散歩　2010年10月21日付　朝刊3段

東京23区は、880万人の人々が暮らし、1千万人を超える人々が活動する首都東京の基礎自治体。東京新聞は2010年、公益財団法人特別区協議会の事業をサポートするべく、各区の魅力とあわせて特別区の理解を促進する紙面を24回シリーズで掲載。魅力あるエリア情報は東京新聞WEBでも継続して発信している。記事でも23区情報を1面から地方版まで細かくカバーし、都内で生活する人や働く人にとって欠かすことのできない情報源となっている。

立川市新庁舎完成　2010年5月5日付　朝刊15段

2010年5月に新庁舎が完成した立川市役所。正式移転が決定してから8年。その他の公的機関や行政機能が集中する地区に、新しいシンボルが登場した。広告局では早々から立川市役所や施工会社などへ出向き、紙面での完成披露を提案。新庁舎の竣工に花を添えた。立川に専属広告会社の営業拠点を持つ東京新聞にしかできないオンリーワンの企画紙面となった。

多摩モノレール全線開業10周年　2010年3月29日付　夕刊10段

2000年の全線開業以来、10周年を迎えた多摩モノレール。この10年の間、多摩地区では立川駅周辺の再開発や圏央道の部分開通、JR中央線の高架化など、さまざまなトピックスに合わせて街や風景が変化を遂げてきた。そんな多摩地区の発展を支えてきた多摩モノレールは、いまや住民の足としてなくてはならない存在。当企画では周年のPRを街の情報とともに掲載した。

文京区シビックホール10周年　2010年2月26日付　朝刊15段

2010年に開館10周年を迎えた文京区シビックホール。クラシック音楽から古典芸能まででさまざまな芸術の発信の場となっている。10周年のPRでは文京区長へ編集局次長がインタビューをし、同ホールのイベントの券売告知と合わせて掲載。また、第二弾として同ホールの名誉館長である中村勘三郎さんへのインタビューを実施。券売告知と合わせた紙面は注目度も高く、すぐに完売となるなど大きな反響を呼んだ。

東京を支える地場企業を応援！

東京信用保証協会　2010年9月7日付　朝刊15段

都内の中小企業の経営支援や多様な保証制度を提供している「東京信用保証協会」。同協会がビジネスマッチングの場として開催した「江戸・TOKYO　技とテクノの融合展2010」を前に、協会の事業内容とイベント告知を記事スタイルで紹介した。イベント当日は、増刷した紙面2,000部を会場に置き、広く事業主などの関係者に周知を図った。

東京都信用金庫協会会長インタビュー　2010年6月15日付　朝刊15段

6月15日は信用金庫法が公布・施行されたことにちなみ、「信用金庫の日」として、各地の信用金庫でもさまざまな地域貢献活動が展開されている。東京新聞では2010年、同協会が実施する「優良企業表彰」に「東京新聞賞」を提供。編集記事で連日表彰企業を紹介したほか、同協会の石原会長へ東京本社代表がインタビューをし、5段広告と合わせて掲載した。

都の企業　2009年9月25日付　朝刊30段
東京の革　2010年10月9日付　朝刊15段

東京には百年以上の歴史を持つ中小・零細企業が数多くあり、時代の変化に対応しながら生き残ってきた。例えば、したまち地区の地場産業である皮革産業。「東京の革」では、その質の高さを職人への取材を通して紹介。東日本鞄工業組合が東京都の助成を受け、国際的なファッションイベントに出展するタイミングに合わせて紙面化した。「都の企業」では、東京新聞125周年に合わせて東京新聞フォーラム「都の企業・21世紀の夢づくり」を企画し、中小企業の在り方を議論した。

心のふるさと、したまち発信！

おかみさんサミットin浅草　2010年6月29日付　朝刊15段

NPO法人全国おかみさん会が毎年各地で開催する「全国おかみさん会サミット」。東京・浅草で開催された2010年、浅草おかみさん会理事長の冨永照子氏をはじめ、さまざまなおかみさんとの交流を紹介しながら、賑わいのある華やかな紙面を掲載した。浅草界隈の老舗、名店など多数から協賛をいただき、当日の紙面が飲食店に掲示されるなど大きな反響を呼んだ。

したまち商店街　2010年7月23日付　朝刊3段

当企画はしたまちエリアの4つの区（台東、墨田、葛飾、江戸川）の東京新聞販売店が推薦するお店として、したまち版に掲載。掲載されたお店は地元のうなぎ屋からお弁当屋、居酒屋まで地元をよく知る新聞販売店だからこそ紹介できる名店ばかり。地域に根づいた新聞販売店との絆が、地元の活性化に一役買っている。

旬で粋な台東区を楽しもう企画　2010年3月19日付　夕刊10段

伝統・芸術などの豊かな文化のみならず、商業の中心地として栄え、有数の商店街が数多く点在する台東区。面積は23区の中で最も狭いものの、春から初夏にかけては大小さまざまな祭りが開催され、多くの観光客で賑わう。「祭り」というキーワードを通し、台東区の魅力を迫力ある紙面でPRした。

かっぱ橋道具まつり企画　2010年10月4日付　夕刊10段

上野と浅草の中間地点に位置する「かっぱ橋道具街」は、170以上の店舗が800メートルにも連なる道具の専門商店街。毎年そこで開催される祭りでは道具供養祭や物産展など、さまざまなイベントが行われ、最終日は歩行者天国になるほど。その来街者促進にと、東京新聞夕刊テレビ面のスペースを使い、読者へ迫力ある紙面でPRした。

建設途中の東京タワー（昭和33年）

天空に夢を追って

東京を伝え続ける東京新聞

人間は古（いにしえ）より、空飛ぶ鳥や雲上の高峰に憧れの思いを抱いてきた。地上とは別世界の「超天空」に、本能的に夢と希望を思い描くのだろう。

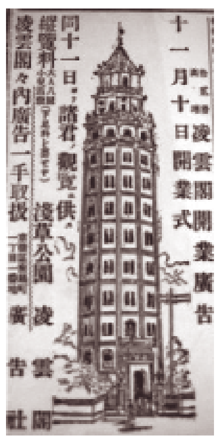
いま墨田区に建設中の東京スカイツリーは、まさに、その夢を象徴する風景である。開業予定は二〇一二年春。完成すれば電波塔としては世界最高の六百三十四メートルになる。天空にそびえるタワーの雄姿は、ツリー街区にどんなにぎわいと経済効果を呼び込み、どんな街に変えていくことだろうか。

東京の「天空物語」は明治二十三（一八九〇）年、浅草に誕生した凌雲閣（りょううんかく）（通称十二階）に始まる。雲上に突き出る塔。それが命名の由来だ。高さ六十五メートル。スカイツリーに比べると、わずか十分の一ではあるが当時は驚異の高層塔だった。東京新聞の前身、都新聞の記者は頂上からの絶景に感嘆してこう伝えている。

「市中すべて眼下にあり、老人も幼子も男も女も、家も牛も馬もすべて寸人豆馬の観あり。脚下の観音堂やパノラマ館もまるで盆栽の山。彼方には富士山や筑波山も…」

塔内では連日、音楽会に演芸、美人芸者コンクールなどが開かれ、三日間で一万二千人が訪れた、とあるから大混雑だったろう。だが凌雲閣は関東大震災で崩壊、華やかで短い歴史を閉じる。八十八年も前のことだ。

関東大震災で上部が崩壊した凌雲閣



都新聞（本紙の前身）に載った凌雲閣の開業広告

日本は戦後、焦土の中から奇跡の復興を果たし、昭和三十年代には高度成長を遂げていく。そんな躍進日本の象徴が東京タワーであった。完成は昭和三十三（一九五八）年十二月。高さ三百三十三メートル。まだ日本は貧しかったが、人々はタワーの雄姿に夢を重ね、必死に働いて高度成長の花を咲かせていったのである。

現在、東京新聞はスカイツリーを定点観測する一方、折に触れて伸びゆく雄姿を追い続けている。明治の凌雲閣、昭和の東京タワーと同じように…。東京新聞はいつの時代も読者の皆さんに夢と楽しみと、そして移り行く東京の姿を伝え続けていく。それこそが東京新聞の姿勢である。

（編集委員・田中哲男）

高さ 600mを越え、自立式の電波塔として世界一の高さになった東京スカイツリー（3月1日、東京都墨田区で）

わが東京新聞

〝手が届く〟新聞

昭和信用金庫
事業支援部部長
秋山祐介

メディアである東京新聞さんと地域金融機関である私どもには、一見何の関係もなさそうです。両者を結びつけたのは、「地域密着」というキーワードでした。東京新聞には他の新聞では読むことができない、地域の身近な話題が豊富です。一方、私どもは地元の中小企業や住民の皆さんに役立つ業務や支援活動を基本にしています。つまり、ともに「地域密着」であることが存在理由になっているのです。

広告会社の方からご連絡があり、お会いしたのが三年前。ビジネスマッチングなどの事業展開に東京新聞を活用しては、というお話でした。先行している事例をもとに説明を受けましたが、なにしろそれまで新聞に広告を出した経験もなく、効果も半信半疑でした。

読者特性など、いろいろな資料を作って熱心に説明していただき、実際にイベントの告知広告を載せてみることになりました。すると川崎や埼玉など思わぬ地域の読者の方々、さらに他の金融機関や県外の信用金庫など、実に幅広いエリアから多くの方が来場されました。想像以上のできごとでした。

東京新聞さんとは事業の進め方についても同じ目線で話し合えましたし、記事でもいろいろ取り上げていただき、新聞をとても近い存在に感じました。おかげで広報活動を盛り込んだ報告書づくりもスムーズにできました。

そしてもう一つ。地域を活性化することは、私たち信用金庫の最大の目標です。そのためには行政をはじめ大学や民間のさまざまな団体との連動が欠かせません。東京新聞さんと連携できたことでイベントの付加価値が上がり、各団体との折衝もしやすくなって、一段上のステージに踏み出すことができたと思っています。

やはり新聞は新聞なんです。その力はすごいと思います。情報を発信していく媒体としても効果的。そうしたことは、使ってみるまではわからなかったことですし、今では「使わないともったいない」とも思っています。

二年前に都内版が三つに細分化されてから、東京新聞はより身近になりました。ビジネスパートナーとしても、一読者としても東京新聞は〝手が届く〟新聞といえますね。

2010年7月6日付 朝刊5段

人は変わっても新聞は続くから

東京新聞浅草橋専売店

五年前、愛知県の一宮から上京し、したまち台東区の三筋でいまのお店を切り盛りする安藤逸朗さん（50）。四〇歳の時に一念発起、転身先に選んだのが中日新聞の販売店だった。初めて見る新聞宅配の世界。二百軒からの受け持ち先に、手際良く実に正確に届けて回る配達員たちが、安藤さんの眼には「天才！」に映った。そして一宮で五年、販売店修行で培ったのは、「しんぼう強く。一歩一歩」の想い。

「新聞というのは読んでもらえる地域との絆づくりが、何より大切ですよね。東京のお店が三年目に入った頃から、『ENJOY!』というタイトルのてづくり新聞を発行しています」。発行は毎月第三水曜で二千部。地元の消防や警察から住民に一番伝えたい情報を原稿でもらい、販売店スタッフがカメラ片手に地域を丹念に歩き、祭りや話題、イベント情報などを集めては発信する。通算三〇号を超え、住人たちに名前も知られ、楽しみにしていると声もかけられるようになった。

「新聞をお届けする私たちも、読んでくださる方々も代が変わっていくのは当たり前ですが、新聞自体はいつまでも続いていきます。だから私たちは、東京新聞そのものに読者が付くことを目標にしています」

東京新聞を気に入ってもらうため、安藤さんの浅草橋販売店を含むしたまち南ブロックでは力をあわせ、『したまち商店街』という新聞広告づくりに取り組んでいる。東京新聞の〝したまち版〟紙面の強化に役立てるべく、各販売店で近隣のおすすめ店舗を一店ずつ集め、ひとつの〝商店街〟に仕立て、東京新聞でしか手に入らない、オンリーワンの情報を読者に提供しようという試み。「やる以上はね、お店の人に喜んでもらいたいし、地域の話題にもなってほしいから、次は紹介するお店の折込チラシを私たち販売店で作って、広告とセットにしたらどうだろうって話し合っています」。

2010年12月8日付 朝刊3段